

SHIN CLUB 290

(株)辰 東京都渋谷区渋谷3-8-10 JS渋谷ビル5F

tel/03-3486-1570 fax/03-3486-1450



「WHARF 六本木」 撮影：NISHIKAWA MASAO

今月のトーク/monthly talk

繋ぐ建築

SHIN CLUB265号で掲載いたしました「WHARF 神田三崎町」。事業主である株式会社サンウッド様、設計の株式会社 SALHAUS の2件目のご依頼となる「WHARF 六本木」が竣工いたしました。

本物件が建つ六本木という地名は「昔、6本の大きな松があった」ことや「木の名を含んだ6つの大名屋敷が存在していた」ことが由来とされています。江戸時代の武家屋敷が並ぶお屋敷町から明治時代には日本陸軍の軍事施設が目立つようになったことで戦争による空襲で多くが焼き払われてしまいました。終戦後にはアメリカ軍による駐留で外国人向けの飲食店、商店が展開されるようになったそうです。その後も芸能人や海外のスターまでもが出入りする店ができるようになったことで歓楽街やクラブで賑わう夜の街のイメージを持つようになりました。

現在では六本木ヒルズやミッドタウンをはじめとしてオフィスビルが集中しておりサラリーマンやOLの姿が目立つビジネス街としての側面も強くなってきています。

そんななか、六本木通りを赤坂側へと下る緩い坂道を交差点から数分進み、曲がった先の細長い敷地が今回の計画地となりました。7×37mの敷地東側には前面道路を挟んで近年建てられたタワーマンションが、西側には雑居ビルなど中層の建物が立ち並び5m程の擁壁を背負っています。

また、六本木通りからは雑居ビル間を通る路地をつなぐようにフランス坂が西側にあり、敷地の高低差や新旧異なる建物の雰囲気を含む場所だといえます。

4棟の雑居ビルが並んでいた敷地を1つの建築物へと建て替える計画となった本計画において設計を担当した株式会社 SALHAUS は「元々の道のスケール感を継承し、間口の広さを活かして1つの大きな建物にするのではなく、小さな建物が集合したイメージの建築とすること」「建物の真ん中を通り抜け道を通し、上下2つの世界をつなぐこと」という2つの条件を元に計画をおこなったそうです。

それらの条件を元に建てられた「WHARF 六本木」は前面道路に面する多角的に切り取られたような東側壁面が特徴的です。一部の面では波板を用いることでさらに複雑で印象的に仕上がっています。上階に向かうほどセットバックしていくのは天空率により要求床面積を確保しているためだそうです。

さらに、建物前面道路と西側の路地とをつなぐ共用部のファサードは建物間口中央を穿つように配置され、立体的な通り抜け動線として機能するだけでなく、路地奥へと抜けていく視線や緩やかな曲がり階段によって共用部空間のゆとりや解放感が感じられます。

周囲の建物と比べ異彩を放つ独創的な外観となった本物件はテナントビルとして使用予定です。

WHARF 六本木

2つの世界を繋ぐ「中くらの建築」

計画地は雑居ビルや飲み屋など、昔ながらの六本木の雰囲気を保つ建物が密集する西側の街と、真新しいタワーマンションをはじめ、21世紀に開発された東側の新しい街に挟まれた、新旧の境界面とも言える場所にある。2つの世界に面する建物をどのように表現し、かつ都市的な意味を持たせるかが、本計画のテーマであった。

初めて敷地を訪れたときに直感的に湧いてきたのが、2つの世界を繋ぐというイメージ。性格の異なるエリアの間を人々が自由に通り抜けることが出来、各部屋へのアクセスを向上させることは、街にとってもこの建築にとっても非常に重要だと思った。この通り抜けは、建築的な面白さだけでなく、建物の商業的な価値の向上にも直結する。事業主にプレゼンテーションしたところ、この思想に大変共感していただき、それがプロジェクトの出発点となった。設計を進めるなかで、この通り抜けは建築の骨格としてどんどん成長し、建物の中央を大きく削り出したようなヴォイド空間となった。階段は建物の屋根面へと繋がっていき、まるで都市のなかで山登りをしているような体験ができる。足下にある雑居ビルの立ち並ぶ昭和の六本木の街並みからスタートし、上階に登るにつれ、首都高速や六本木ヒルズ、東京ミッドタウン、麻布台ヒルズなどの超高層ビルへと視線が抜けていく。ダイナミックな都市の変化を内側から感じられる建築となった。

建物のボリュームは上階に行くにつれセットバックしているため、部屋の面積も段々と小さくなっていく。建物の用途は、申請上は事務所と飲食・物販店舗だが、利用する人が空間を感じて、自由に使ってくれれば幸いである。最上階の小さな部屋は、住宅としても使えるような親密な空間になっている。各室を繋ぐ共用部は、この建物で働く人々を繋げる重要なパブリックスペースとなっている。一般的な都心のテナントビルは、縦積みになったフロアをエレベーターと避難階段で繋いでいるだけで、共用部は非常に貧しいものが多い。そのような建築では、入居者同士のコミュニケーションはほとんど発生しないが、この建築の共用部は、単なる動線ではなく、このビルを訪れる人々や、働く人々が互いに交流し、協働できるような場所として設計した。既に入居したある会社は、最上階の2部屋をまとめて借りて、間の屋外空間を含めたワークスペースとして使い始めている。利用者が空間に触発されて主体的に使い方を発見してくれたことがとても嬉しい。

共用部のヴォイドスペースは同時に、厳しい斜線制限のなかで最大限の建物ボリュームを確保するための戦略でもある。間口の広い建物の中央部を削り取ることは、天空率を上げることに繋がる。建物の両端の壁を斜めにカットしていることも、天空率を上げると同時に、室内からの多様な方向への眺望を得ることに貢献している。このように、建築的な魅力と、商業的な付加価値の向上を両立させることが、私たちが都心の建物で常に意識して取り組んでいることである。

六本木ではこれからも大規模な再開発が続くが、昔からこの街が持っているパワーも健在である。新旧の六本木の街の魅力と繋ぐ「中くらの建築」として「WHARF 六本木」がこの街を象徴する建築として存在感を発揮していくことを願っている。



建物夕景。多角度から漏れる明かりが印象的



建物上空から。多角形の外観が特徴的な2棟をデッキが繋ぐ



建物西側



繋がれたデッキは交流の場として利用可能



3階貸室。多角形屋根を支える梁が特徴



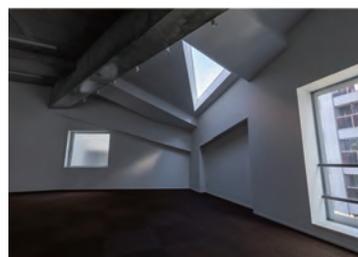
2階貸室。店舗部分はスケルトン渡し



雑居ビルに囲まれた世界からみた西側立面



正面エントランス。奥には別世界が広がる



多角形部分の天窗から光が差し込む



5階共用デッキ

(SALHAUS / 安原幹氏 談)

所在地：港区六本木3丁目
 構造：RC造
 規模：地下1階、地上5階
 用途：飲食店・物販・事務所
 設計・監理：SALHAUS・moires
 事業主：株式会社 サンウッド
 施工担当：池山・岸崎（郷チーム）
 竣工：2024年1月
 撮影：アック東京

柔らかいルールから生まれる自由な発想

安原幹・田中邦幸・佐々木毬乃 / SALHAUS



Motoki Yasuhara

Kuniyuki Tanaka

Marino Sasaki

SALHAUS 事務所にて 撮影：アック東京

今月は「WHARF 六本木」の設計をおこなった SALHAUS の主宰建築家の安原幹氏と担当の佐々木毬乃氏、共同設計者で OB の田中邦幸氏にお話を伺いました。

安原氏は 2008 年に渋谷区猿楽町で、建築家の日野雅司氏、柄澤麻利氏と共に SALHAUS を設立。当時より北山恒氏をはじめ多くの建築家から弊社のご紹介を受けていたそうですが、SC265 号でご紹介の「WHARF 神田三崎町」にてようやく実現。「WHARF 六本木」は同じ事業主によるコラボレーション第 2 弾となりました。

— 前回の「WHARF 神田三崎町」は鉄骨造でしたが、「WHARF 六本木」は RC 造でかつ複雑な形状でしたね。

安原：設計から現場検討まで、1/20 のスタディ模型をフルに活用しました。「WHARF 六本木」は、厳しい高さ制限のなかで床面積を確保するために、鉾物のような多面体形状の建物としました。天空率計算を用いて建物の外形を検討する一方で、模型をのぞきこみながら、内側からの視点で内部空間の検討も同時におこない、手摺や階段などのディテールの検討にも活用しました。今回は型枠に 2 種類の波板を使用したのですが、現場でつくってもらった原寸のモックアップに加えて、この模型で全体の見え方をチェックしました。全体と部分をひとつの模型で同時に考えられる、ギリギリの大きさの建築だったと思います。

— 今回の計画は佐々木さんにとって終始 1 つのプロジェクトに関わったデビュー戦と伺いました。いかがでしたか。

佐々木：想像していたよりも地道で、本当に人の手で造っているんだなと実感しました。同時に描いた図面がそのまま形になるので、設計者はとても責任重大だなと（笑）。ですがその実感があつたからこそ、現場の人たちと直接話し合せて検討し出来た納まりも多かったです。設計時は全く想像もしていませんでした。

安原：若い担当者にとってそのリアルさを感じ取れることはとても重要です。「ディテールとはその都度考えて開発していくべき物」という想いから、SALHAUS には決められたディテールや納まりなどのルールが一切ないんです。そうでないとルールに縛られて新しい発想が出てこない。佐々木の感覚は非常に貴重だと思います。

田中：今回の場合、通常だと真四角にして階あたりの占有面積を下げ、タワー型にすることが多いのですが、それとは全く違う回答になりました。「今までにない場所やそこでしか出来ないことを考える」というのは代表たちが取り組んできたことなので、全力で注力し、時間をかけてやり切ることを設計理念として常に思っています。

— SALHAUS として、設計の強みはどんなところでしょうか。

安原：私たちの事務所には、専門としている特定のビルディングタイプはありませんし、公共・民間や都心・地方の区別もなく様々なプロジェクトを手掛けています。私が常に意識しているのは「建築の力でその環境が持っているポテンシャルを最大化する」ということです。「WHARF 六本木」では、建築のつくり方で街における人の流れを活性化し、同時に建築の付加価値も上げることができたと思います。他方で、地方都市でのプロジェクトでは、地元の材料や技術を使って、地域にとって重要なパブリックスペースをつくることにチャレンジしたりします。私を含め 3 人の建築家で、平行して多彩なプロジェクトを進めていますから、事務所内では常に雑多なトライアルが併走しています。そんな環境で、常に新しいことにチャレンジすると同時に、社会的価値がどこにあるかを考え続けています。スタディのやり方はとてもアナログで、図面と模型でトライアンドエラーを繰り返しながら、そのプロジェクトでやるべきことを見出ししていきます。時間は掛かりますが、正攻法で考え続けることで、他の事務所にはない魅力が生まれるのだと思います。

— 「WHARF 六本木」でも周辺環境を上手く活かされていましたね。

安原：外側からと内側からの視点を行き来しながらスタディを繰り返すのが設計の 1 番面白いところです。このプロジェクトにおいては、都市からの視点と建築からの視点の両方から考えることに繋がりました。中央のヴォイドスペースは、周辺の都市環境を内側から感じられる空間になりました。都市建築においては、建物の外形よりもヴォイド、即ち空隙のデザインの方が重要です。都心では地方に比べて土地が狭く、法律など様々な制約で縛られがちなので、外形の操作は自由度が低くなりますが、逆に内側のヴォイドスペースや、窓などの開口部のデザインは自由におこなうことができます。つまり、内側から建築にキャラクターを与えることが可能なのです。この考えは、私の大学の恩師である大野秀敏氏から教えられました。今でも、都市建築を考える際に非常に有効な手法だと思います。

佐々木：周辺環境との接点が増えることで空間自体の価値が上がり、使い方の幅も広がります。

田中：設計者として外部にも居場所を作る意識は変わりませんが、近年ではコロナウィルスの影響もあり、世間の受け止め方として外部空間の価値をより重視するようになりましたね。思想に共感してもらえる時代が来て非常に嬉しく思います。

— 本日はありがとうございました。

安原 幹（やすはら もとき）

1972 年 大阪府生まれ
1996 年 東京大学工学部建築学科 卒業
1998 年 同大学院
工学系研究科建築学専攻 修士課程修了
1998～
2007 年 山本理顕設計工場
2008 年 SALHAUS 設立 共同主宰
2011～
2018 年 東京理科大学工学部 准教授
2018～ 東京大学大学院工学系研究科 准教授

田中 邦幸（たなか くにゆき）

1986 年 和歌山県生まれ
2009 年 信州大学 社会開発工学科 卒業
2011 年 信州大学大学院
工学系研究科社会開発工学専攻 修士課程修了
2011～
2021 年 SALHAUS
2021 年 moires 設立

佐々木 毬乃（ささき まりの）

1993 年 茨城県生まれ
2017 年 東京理科大学
理工学部建築学科 卒業
2019 年 東京理科大学
理工学研究科建築学専攻 修士課程修了
2019～
2020 年 SANAA
2020 年 SALHAUS

TOPICS/INFORMATION

2024 年度の新入社員・キャリア採用を紹介します

<24 年度 新卒入社>



■高橋 諒 (たかはし りょう)
 日本大学
 理工学部
 建築学科

数ある建築企業のなかから、この会社でしか出来ない経験があると強く感じ、入社いたしました。友人や知人に自慢できるような建築に携われるよう、日々成長していきたいと思えます。



■齊藤 航希 (さいとう こうき)
 帝京大学
 法学部
 法律学科

未経験で知識もほとんどないのですが、たくさん勉強をして先輩方から早く一人前の仕事を任せられるようになるよう、精一杯頑張ります！よろしくお願ひします！



■BATSUKH JAMUKH (バツフ ジャムハ)
 東京デザイナー学院
 建築デザイン専攻
 建築デザイン学科

建築や施工管理の知識はありませんが、精一杯頑張っ行って行きたいと思ひます。これからお世話になります。よろしくお願ひします。



■田中 佑采 (たなか ゆうと)
 学習院大学
 文学部
 心理学科

これからの業務についてあまりにも浅学ではございますが、少しでも早く会社のお力になれるよう日々邁進する所存です。よろしくお願ひします。

<第二新卒入社>



■小関 敏弘 (おせき としひろ)
 東京ビジネス・アカデミー
 経営学科
 ビジネスマネジメント専攻

毎日が貴重な学びの場である意識を強く持ち、日々の業務、先輩方からノウハウを盗み、1日でも早く戦力になれるよう精進して参ります。至らない点も多いと存じますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひします。

<キャリア採用入社>



■TIN KO KO MAUNG
 (ティン コ コ マウン)

「何事にも挑戦すること」「建築物」が好きな私にとって、その両方を備えた辰の建築施工管理業務は大変興味深いと感じました。実経験を重ね、様々な知識を身につけ、デザイン性の高い建物をたくさん造っていきたく思ひます。ご指導のほどよろしくお願ひします。

<キャリア採用入社>



■川口 潤一郎 (かわぐち じゅんいちろう)

今までの経験を活かして懸命に頑張りたいと思ひます。また、同時に一級建築施工管理技士を取得するために努力しています。今までの会社では休日が取得しにくい会社でしたので、仕事と休日にメリハリを付けながら仕事をしたいと思ひます。よろしくお願ひします。

本社研修後、1か月の現場研修を経て、本配属となります。どうぞよろしくお願ひ致します。

<本社研修内容>

・現場体験	4/8 (月) ~4/16 (火)	講師：讃井
・積算研修	4/17 (水) ~5/10 (金)	講師：笹原
・営業研修	5/14 (火) ~5/15 (水)	講師：村田
・カスタマー室研修	5/16 (木)	講師：折田
・第2 建築部研修	5/17 (金)	講師：鯨津
・CAD研修	5/20 (月) ~5/28 (火)	講師：夏井
・建築本部研修	5/29 (水) ~5/31 (金)	講師：讃井

「(仮称) 田園調布 5 丁目計画」新築工事 地鎮祭

2024 年 4 月 23 日



近隣様のご協力のもと、安全第一で建築いたします。

構造 / 規模 : RC 造 / 地下 1 階・地上 2 階
 用途 : 共同住宅
 設計 : (株) PORTLOUNGE 一級建築士事務所
 施工担当 : 池上・大塚 (池上チーム)
 完成予定 : 2025 年 9 月

「新入社員顔合わせ」全体会議 — アットビジネスセンター —
 2024 年 4 月 6 日 (土)



この日おこなわれた全体会議で、新入社員にとって初めてとなる、現場社員たちとの顔合わせをおこないました。

各自自己紹介と意気込みを発表し、これから始まる本社研修へ向けて意識を高めてもらいました。

編集後記

・SC283号で掲載いたしました、弊社グループ会社である池田建設が手掛ける改修工事「旧本多邸改修工事」が竣工を迎え、現場見学会が開催されました。登録有形文化財として歴史的にも大変貴重な木造建築「旧本多邸」。どのように生まれ変わったのか、次月号でご紹介予定です。

(株)辰通信 Vol.290 発行日 2024 年 5 月 10 日
 編集人：本間夏来/村上由衣/土屋祐一郎 発行人：岩本健寿

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 3-8-10 JS 渋谷ビル 5F TEL:03-3486-1570
 FAX:03-3486-1450 E-mail : daihyo@esna.co.jp URL:http://www.esna.co.jp



「SHIN CLUB」は WEB 上でもご覧いただけます。

バックナンバーも PDF で掲載しています。

スマホはこちらから →

